

「子ども論ノート・・・ケアの社会倫理」

大越愛子

(一) なぜ少子化なのか

一九四九年に刊行した『第二の性』で、S・ドウ・ボーヴォワールは既にこう述べている。

「女の身体は全体が種の維持のために方向づけられている。しかしすでに述べたように、人間社会はけつして自然のままになつてゐるわけではない。とくにここ百年ほど前からは、生殖機能は生物学的偶然にのみに支配されるのではなく、意志によつてコントロールされるようになってゐる」①

当時まだ少数派であつたこの生殖観は、特別な宗教的・文化的背景をもつ場合をのぞいては、今やほとんどの女性に受け入れられている。それゆえ彼女らは、生殖を選択することが、自分たちをどのような状況に追いやるかという問題に敏感である。

女性が妊娠し、十ヶ月近くその状態に耐え、そして出産に至

るプロセス、そして生まれてきた未だ無力な子どもを養育すること、つまり食べることに、歩くこと、排出することなどを教えることでいくことがいかに大変な労働であるか、またそこで願ひてしまつた子どもを見守るために時間という資源が必要などの問題を、彼女たちは既に知つてしまつてゐる。他方、社会の方は相も変わらず、それを「妊娠・出産が可能」とされる身体が持つ自然的使命として、あるいは近年は「産んだ者」の自己責任問題とみなして、積極的に関与してこなかつた。

この先進国とされる日本で、妊娠・出産が安全なものは決してないということは、産科の激減とそこから生じるお産難民の増加によつて明示された。それなのに、医療とは別に独自に出産を担つてきた助産院は、医療体制下に組み込まれることを強要され、それを拒否する場合は廃院へと追い込まれてしまつた。

また女性が仕事と子育てを両立させる環境整備も、未だ不十分である。労働形態の多様化という名目の下に正規雇用は減少し、派遣その他の非正規雇用が増加している現代、正規雇用の労働は男性なみに働くことが条件となり、女性が妊娠・出産に踏み切る場合は実質的に仕事を辞めざるをえない。その場合、彼女は時間単位で賃金をえていたペイド・ワークから、さらにもっと過酷な休み時間のない労働、つまり出産・育児労働に入るのだが、それは支払われない労働、アンペイド・ワークなのである。

女性が生子をも「産む」「産まない」ことを選択する以前に、「産めない」状況が眼前にある。そうした状況がもたらした帰結が、「少子化」現象なのである。もちろん主体的に「産まない」選択をした女性も少なくないだろうが、やはり「産めない」状況で選ばされたという表現がより適切と言えよう。

こうした少子化現象に危機意識を抱いてか、様々な方策が模索されているが、なかでも二〇〇九年政権をとった民主党のマニフェストの目玉とされたのが、「子ども手当」法案である。この場合の「子ども手当」とは何を意味しているのだろうか。民主党がこの法案を最初に提起したのは、二〇〇六年に遡る。その時「子どもの養育にかかる経済的負担の軽減と次代の社会を担う児童の健全な育成と資質の向上を目的に、児童手当法の一部改正案（子ども手当法案）」として「次の内閣」ネクスト子ども政策担当によって衆議院に提出されたのだが、当時は廃

案となった。それ以降も民主党のマニフェストの中心として提示され、現在ようやく実現の運びとなった。

だが既に、そのための巨大な財源をどうするかという難題が起こつてきている。少子化対策のためにと、子どもの問題が金銭的問題だけへと還元されていくことに危惧を覚える。もちろん出産・育児という従来アンペイド・ワークとされたものに対して、経済的保証が賦与されることは歓迎したい。だが、それだけでは割り切れないものがあるのを感じる。

家事・看護・介護など、その他無数のアンペイド・ワークの中で、育児だけが特化されることに關して、「出産・育児」を選択しない女性にも納得できる説明が必要だろう。

子どもを抱える親の側からも、単なる経済的保証にとどめず、より積極的な子育て支援体制が必要だという切実な声が上がってきている。保育所に入れない待機児童は年々増加している。子どもを囲む文化的環境も劣化している。そうした状況に對する政府の応答は、むしろ曖昧である。それは、「子ども」を、生成・発展していく未来的存在としてではなく、親にとつて経済的負担のかかる者としてのみ捉える、その意味で子どもに無関心な者の「子ども」感に基づいているのではないだろうか。

（二）女性の権利と子ども

現代は、前号②で述べたように、「子ども」を大切にするという見せかけの下で、子どもを疎外、蔑ろにしている時代であ

る。そのことは、子ども問題の出発点といえる、子どもを産み育てることの意味が不可視にされていることとも関連する。妊娠・出産は、病気ではないが、絶えざる危険を伴う労働であることは間違いない。そのことの認識が、ようやく二十世紀後半に国際的に共有されてきた。

一九九四年の国際人口開発会議で「行動計画」が作成され、そこで女性のリプロダクティヴ・ライツは「すべてのカッブルと個人が自由に責任をもって、子どもの数と出産の時期を決定する基本的権利の承認」③と掲げられた。さらに進んで「すべての人々のためにこれらの権利の責任ある行使の推進は、家族計画を含むリプロダクティヴ・ヘルスの領域における政府と地域社会が支援する政策と計画の基礎でなければならない」と宣言された。そこで扱われた問題提起で、本論と関わりのあるものとしては、「家族計画カウンセリング、情報および計画」「出産前のケア、安全な出産、出産後のケア・サービスおよび教育」「人間のセクシュアリティと責任ある親子関係に関する教育と情報」などがある④。

だがこうした課題は、国内では政府や地方自治体の広報でスローガンのに掲げられるものの、一般市民社会にはいっこうに広まっていかない。それは、「妊娠・出産が可能な身体」を持つ者が権利主体であること、そうした者としてケアされる権利を持つ者と認識されていないからではないだろうか。

振り返れば、フェミニズムは元来、「女性」がその存在の特

質とされた性的身体ゆえに受けるものと自然視されてきた不利益は、社会的不正義なのではないかという直感に基づいて始まった。その直感が他者に、とりわけ言説権力を握っていた男性知識人にも理解され共有されるために、フェミニズムは理論化作業に着手し、従来の言説の男性中心主義をあぶりだすなど、著しい成果をおさめてきた。

近代資本主義社会が、「労働」から得られる利益の配分をその存立基盤としながら、生命を産み育むという最も根源的な労働を隠蔽してきたこと、この問題に関しては資本主義の搾取体制を論及してきたマルクスなどもまた同罪であることは、多くの知識人も認めざるを得ないだろう。また近代国民国家体制が、政治の延長として戦争を肯定することで暴力を野放しにし、その犠牲のターゲットは圧倒的に女性や子どもであったことも、もはや隠しようもない事実である。

近代もしくは現代の社会的・文化的構造の分析を行う者にとって、男性／女性というジェンダー二元論が、構造化された暴力を不可視にする装置とされてきた問題を看過することはできない。それゆえ、ヘーゲル、マルクス、フロイト、フーコーなどの男性理論を縦横に駆使して、こうした近現代の構造的暴力の仕組みを解き明かし、ジェンダー二元論を脱構築した「バトラーをはじめとするポストモダンなフェミニズム理論は、言論界に否応なく受け入れられていった。

だが振り返れば、その多くは「女性」という性的身体に深く

言及することなく、女性の構造的劣位という不正義を指摘する

にとどまるものだった。そしてこのような言説は、現代資本主義の大幅な変容に伴って、先進地域において、ジェンダー二元論の拘束が緩んだかのごとき相を呈した状況に即していった。

「女性」の性的身体に関わる議論は、本質主義的として否定されていく傾向が顕著となった。そして現在日本で急速に流布しているのが、「おひとりさま」という表現である⑤。それは、子どもを産もうが、産むまいが、結局人間はひとりだという現代を生きる人間の孤立的状況を反映している。シングルで生きていることが否定的に見られてきた社会状況を言説戦略として、有効であることは間違いない。だがそのために性的身体、特に「妊娠・出産が可能な身体」、さらに「生命を育む身体」に関する議論が希薄になつてはならないと思う。

フェミニズムが子どもの問題と無縁な場所についてしまうことには、本末転倒感がある。それは、子どもを大人中心的な視点で囲い込み、女にとつての損得という論点に収斂してしまうことになるからだ。「女性」問題とは、単に個人としての単体の権利主張のみならず、女性をめぐる人間環境において生じる不正義を問いつつに力点があつたはずである。それは子どもとの関係を放棄することでは決してない。

このノートでは、フェミニズムが陥った陥穽を検証しつつ、ケアを必要とし、かつケアを行う「妊娠・出産が可能な」身体、「生命を育む身体」に基づいた論点からの子どもと女性の

「ケア(Care)」を考えたいと思う。

(二) 自律神話への批判

フェミニズムが子どもの問題を切り離していったのは、まずもって「女・子ども」あるいは「母子一体化」という男性中心的な視点による女性観を解体する必要があつたからである。自らを「女性」というジェンダー二元論の枠組みから解き放ち、「個人」として析出していくこと、そして「個人」の立場に立脚して見えてくる現実の不平等の問題に対応していくことが、主要課題とされたのである。

だがこのいわゆる「平等主義的アプローチ」を推進していくにつれて、フェミニズムが目指す「個人」とは、他者からのケアも受けず、他者へのケアも必要としない自律した存在、経済的にも精神的にも自律した存在、つまり近代以降の合理主義的男性思想において目指された「主体」への同一化ではないかという問題に突き当たることになる。その時に最も顕くのは、女性の性的身体である。

女性がジェンダー二元論においてではなく、「個人」の立場で生きていくことを選択しているにもかかわらず、その身体を他者の一方的な性的欲望の下に置かれることに関しては、「セクシュアル・ハラスメント」という表現で、未だ不十分ながら拒否できることが社会的に認知された。しかしこのことは、女性が自ら性的身体であることを否定し、ひたすら中性化、ある

いは男性化することを意味するわけではない。

だが現代社会において、「個人」であることと「妊娠・出産が可能な身体」であることは、両立が困難な状況にある。前者はケアを必要としない自律存在であるが、後者はケアを必要とする他者依存的側面を持つ。従って女性が「個人」であることの自律的自由を重んずる立場を採り、他者のケアを求めたくない場合に、自らのもう一方の可能性に否定的感情を持つ方向に追いやられるしかない。

フェミニズムは、女性の妊娠・出産という身体的可能性に関して、他者からではなく、自分自身の自由な決断において選択するべきことを主張するが、その身体的可能性に関して否定的刻印を押すわけではない。それは本来、人間を孤立にではなく、他者との関係性の中で再構築すること、その意味でケアという関係性を持つことを重視する思想実践へと展開する側面をもっていたはずだ。

しかしながら、「平等主義」か「ケア重視」かは、フェミニズム先進地域では、絶えざる論争下におかれた。もちろん「平等」が全く達成されていない地域では、この種の論争は成り立たない。無償の「ケア・ワーク」が女性役割であることが、自然視されてきたからである。この自然主義を打破するべくフェミニズムが平等主義を言説化、制度化する必要性を主張したのだが、それが未だ十分実現していないにもかかわらず、フェミニズム内部で、早くも「ケア」をめぐる対立が生じるという矛

盾した現象が起こってしまった。

こうした現象は、ネオ・リベラリズムが席卷したアメリカで特に顕著だった。ネオ・リベラリズム経済は、利潤の拡大化のために、ジェンダー二元論にかかわりなく、優秀な能力を持つ労働者の雇用を主張し、男性なみに働く女性労働者を積極的に求めた。そして実際に大量の女性労働者が出現している。

他方「ケア」問題に関しては、個人の自己責任問題として、公共圏の福祉を削減し、私領域へと片付けられる一方である。このような状況下では、ケアの問題は依然として女性に委ねられたままとなる。この矛盾をフェミニスト法学者マーサ・A・ファインマンは次のように指摘する。

「本質主義論に反対する人たちは基本的な生物学的事実まですべてあいまいにしがちだが、母乳育児と同様に、妊娠と出産は一時的ではあっても、その他の活動に向けられるかもしれない女性の身体的・感情的資源に影響を与える点に留意すべきである。これらはかなりの経済的マイナスをもたらすジェンダー化された影響である。・・・ケア労働を賃労働とは異なる独特のものとして、基本的にその価値を認め、報いるための基本的正義を問う議論に加え、社会学の議論もあわせて行うべきである。平等主義の主導者たちは、ケアの貢献と経済的貢献とを等価値にみなすことで、自分たちが変革を望むまさにその行為を永続化するのに手を貸している。ケアにそれほど重みがないのであれば、男性たちは自分たちの行動を変える根拠は

なくなる」⑥。

このような「ケア」の軽視は、後発ではあるものの、ネオリベリズム経済に突入した日本においても目立ってきている。妊娠・出産という危険な労働に対する社会的ケアが不十分である。それなのにケアを十分受けることなしに出産した母親に、子どもへの過剰なケアが期待されている。そこではケアという行為は、自然発生的愛情に基づくものと捉えられ、それを持たない母親は欠陥的存在と見なされるのである。

だがケアとは、自然的なものではなく、人間関係の中で学習されていくもの、レスポンスされていくものである。そうした認識なしに恣意的なケアが一方的に押しつけられることは、「ケアされる者」にとつての不快な事態、ひいては虐待などの深刻な問題を促す可能性がある。それゆえ、ケアにおいて重要な、倫理的側面を看過してはならないだろう。

(三) ケアすることの倫理

「ケア」の辞書的意味について、教育学者ネル・ノディングズは、「心的な受動的作用(mental suffering)、あるいは専心没頭(engrossment)の一状態と指摘し、さらに「ケアする」というのは、負荷された心的状態、つまり、なにかや、誰かについての心配や、恐れや、気づかいの状態にあること」⑦と述べている。彼女は、このようなケアの受動性を積極的に評価し、新たな倫理学・教育学を提起している。彼女によれば、従来の欧

米伝統の能動的「主体性」優位の思想状況において、このような提起は低い評価しか与えられてこなかった。

だが二十世紀の後半から始まった「主体性」の意識構造を解体分析する思潮の中で、主体とはそれ自体では存立しえず、むしろ他者との応答関係の中で立ち上がってくるものという理解が生起してきた。しかもその他者というのは、フランスの哲学者レヴィナスによれば、「私がそれでないもの、私が強者なら、それは弱者であり、貧しきものであり、「夫を失った者、また遺棄された子ども」⑧なのである。これは、いわば「ケアを求める者」と捉えうる。そして彼は、その他者との関係に倫理の出発点を見いだしている。

フランスのフェミニズムにおいて主体性の回復は重要なテーマであったが、その主体性はもはや従来の「主体」概念ではない。かつてボーヴォワールが男性的「対自存在」に比して、マインス評価を下していた「對他存在」が、むしろ積極的意味を担って再評価されていると考えられる。レヴィナス的な、他者との応答関係において出現する主体という捉え方である。それゆえ男性化する平等主義ではなく、他者との差異の受容を重んじる「差異派アプローチ」を採る。言い換えれば、人間存在をケア関係において捉える倫理的思潮が強いと言えるだろう。日米欧の子育て事情を比較してジャーナリストの横田増生はヨーロッパ社会には『思いやりや連帯』を社会の中核ととらえる考え方が根強くあることに注目している⑨。

アメリカにおいても八十年代はフランスのフェミニズム思想の影響は強かったが、バトラーによって、それらがジェンダー二元論の枠組みを固定化する傾向にあると批判されて以降、影響力は後退し、ネオ・リベラリズム資本主義と手を結んだ平等主義的アプローチが政策面での勢いを増した。だがそうした主流派フェミニズムの強者の論理に対して、教育・医療・生殖などの現場から、ケアの意義を再興する声が高まっている。それは、複雑化する社会において、公的にも対応が求められる「依存」問題が無視しえぬものとなってきたからである。

自律神話において、「依存」dependenceは否定的に捉えられてきた。だが人間は、産まれ育ちつつある時、そして成人になっても病気などの何らかの事情がある時、そして人生の終焉を迎える時に、依存状態にならざるをえない。「依存」を否定的に捉えてきたのは、「依存状態」になっても、そのような状態を留保なく引き受ける存在が自明視されてきたためである。ジェンダー二元論が自然視されていた時代においては、それは女性の役割だった。だが女性たちがそうした役割の自明視を拒否し始めた時代になって、ようやくそれが万人の問題となったわけである。

キャロル・ギリガンが倫理学において、自律した個人を基盤に立てられた「正義の倫理」に對置して、複数の他者とのネットワークにおける関係性を重視した「ケアの倫理」を主張して以来、「ケア」は倫理的にも重要な論題になっている。だが、

ギリガンも指摘しているように、それはまさに対人関係の現場で生起するものであるため、体系的に記述されることは困難であり、状況依存的にならざるをえない。それを踏まえて、敢えて基軸的な論点を取り出すならば、それが相互関係性の問題だということだろう。

ケアする行為、すなわちケアリング(caring)において、しばしば提示されるのは、「ケアする者one-caring」と「ケアされる者cared-on」という二分法である。これは看護や介護などの援助者の立場の議論によく見られるが、そうした技術論を超えて、ノディングスが倫理的論点でケアを捉えているのが注目される。それがケアの相互性である。

「あきらかにケアされるひとは、ケアするひとに依存している。しかし、奇妙なことだが、ケアするひとまたケアされるひとに依存している。・・・私たちは、それぞれ、ケアリングと道徳的な関係の中で他のひとに依存している。だから、わたしが探し求めているよさは、言い換えれば、倫理的な自己の完成は、部分的ではあるにせよ、あなた、つまり他のひとに依存しているのである」^⑩。

彼女の議論で注目されるのは、従来の「ケア」論で陥りがちな、ケアの対象によって「ケア」の問題を区別するのではなく、子どもから高齢者、障がいを持つ人のみならず日常的な一般的関係性においても、「ケア」関係が普遍的に遍在しているという論点を、豊富な例とともに展開していることであ

る。そこから、各種の事例に貫通する原理的な問題が提示できるのである。

ケアの関係で最も警戒されねばならないのは、「ケアする者」と「ケアされる者」との間に権力関係が生じることである。そのため、「ケアされる者」が望まない「ケア」を「ケアする者」が一方的に行ないがちとなる。そのように望まない「ケア」の強要は、虐待の温床となる。

ケアリングがそのような落とし穴に陥ることを回避するために、ノディングスは「ケアすること」の相互性を強調する。「ケアする者」は、自分の「ケア」が「ケアされる者」にとつて望ましいものなのかどうか、という点において、「ケアされる者」に依存している。そして「ケアされる者」もまた、その相手の気がかりな心情をケアするべく、是非の感情を率直に表していく。こうしたケアの相互性が、「ケア」関係を一方的なものとせず、相互にとつて受容できる関係へと開いていく。それゆえ、ケアリングは、「ケアしたい」「ケアせずにはおれない」という自然な感情と行動の発現にとどまらず、「そのケアは果たして妥当なものなのかどうか」「ケアを強要することになつていないかどうか」を検証する作業が必要となる。結局「ケアすること」は他者との関わりを通して、自己を倫理的に検証する作業へととどつてくるのである。こうした「ケアすることの倫理」について、ノディングスは語る。

「倫理的な自己は、現実の自己として、ケアしケアされるひ

ととしての理想的な自己の見通しとの間の能動的な関係なのである。倫理的な自己は、関係性についての基本的な認識から生まれてくる。その認識は、自然にわたしを他のひとに結びつけるが、この他のひとを通じて再びわたしを自分自身に結びつける。他のひとたちをケアし、そうしたひとたちにケアされるとき、わたしは自分自身をケアできるようになる。(わたしはしなくてはならない)」という独自の内的な声は、わたしのうちにあるこの他のもの、すなわち、この理想的な自己とのかかわりで生起する。わたしはその声に応答する。他のひとに対するケアリングが失敗に終わったとき、わたしを支えてくれるのは、このケアリングなのである。このケアリングこそ、実際にはケアしてないわたし自身をケアリングの方向で超えられるようにしてくれるのである」^⑪。

「ケアすること」と「ケアされること」をめぐるこのような循環性は、ケアの活動的であると同時に内省的な側面を描き出している。

(四) 子どもとケア

このような「ケアすること」の相互性の倫理は、「ケアすること」と「ケアされること」が絶対的な非対称関係にある時期の子どもとの関係においては、どのように適応できるのだろうか。親と子が閉じた二者関係にあることに関する危険性については、精神分析などで多々指摘されている。だがそれは、親子

関係を家族内部でのみ捉え、そこに社会性を見ようとする論点に基づくものではないだろうか。家族の状態が変化しつつある現在、子どもに対して、また子どもを妊娠・出産する女性に対しても、第三者もしくは社会的なケアの必要性を検討することが求められている。

子どもを妊娠・出産する女性は、自らに依存する新たな生命を「ケアする」存在ではあるが、しかし同時に彼女自身、もはや自律的には生きられない、依存的状況に落ち込むゆえに、「ケアされる」存在となる。この二重的な状況を、ファインマンは「二次的な依存」と捉える。

「逆説的だが、依存を引き受ける、避けられない依存の世話をする」ことが、ケアする者自身の依存を作り出す。私は政策論議のなかでしばしば見落とされ、ステイグマをつけられるにいたるこの依存のかたちを、「二次的な依存」と名づける。二次的な依存とは、やむをえず誰かに依存しなくてはならない人のケアの責任を果たす（あるいは、割り振られた）ときに起こる。誰かをケアする人が、ケアを行うために自分自身も人や社会的資源に頼らざるをえなくなるというごく単純なからくりをはっきりとさせるために、私はこの依存を「二次的な依存」と呼ぶ」^⑫

彼女は、「ケアする者」の二次的な依存については、従来「家族」が担う私事とされ、社会的に放置されてきたことを指摘する。そしてそれに抗して、この二次的な依存への社会的・集

团的責任を明らかにする。

「このタイプの依存が人類の条件にもともと備わっているという自覚があつてこそ、避けられない依存をケアする者の立場に立ち、ケアの便宜のための社会的資源の必要性を訴える概念の土台を作りだせるのだ。正義は社会にケア労働が社会のための善の生産だという自覚を迫り、そして平等の理念は、この労働がただあてにされるだけでなく、尊重され、補償され、制度的に対処されるべきだと求める」^⑬。

ファインマンは、「子どもを妊娠・出産」し「ケアする者」と決断した女性は、社会から「ケアされる」者と処遇されるべきと主張している。彼女によれば、子どもを「産み育てる」とは、単なる自己責任の問題ではなく、「社会と社会のあらゆる組織の未来にとって必須条件」なのである。社会は総体としてのケア行為がなければ、存在しえないのであり、その意味で「ケアする者」に負っている。それゆえ「ケアする者」が負わざるを得ない不利益を、社会がケアすることが道徳的義務であるとさえ指摘する。

ファインマンの議論は、現実社会の経済的・構造的ケアの欠如を問題化しているが、情緒的・倫理的ケアの側面も当然重視されねばならない。

「妊娠・出産する」存在は、「ケアする者」となりつつある存在として「ケアされる者」という二次的な依存状態にある。この二次的な依存状態が社会的に十分受け入れられ、実際に経済的・

構造的のみならず、情緒的・倫理的にケアされることを体験すること、そのような「ケアされること」の喜びと感謝を抱くことが、彼女自身が「ケアする者」へと生起していく契機となるだろう。ケアの相互性は、「ケアする者」と「ケアされる者」との間だけでなく、そこに第三者、もしくは社会が介入すること、さらに開かれたものとなるのではないか。

この場合の第三者は、一般的には配偶者や親族関係にある者といえようが、人間関係の多様化によって、周囲に援助者のいないシングル・マザー、シングル・ファーザーの場合も想定されねばならない。彼らがシングルであることには様々な理由があるだろうが、それらを彼らの自己責任として切り捨てられてはならないのである。周囲に援助者がいない場合には社会がケアをすることが要請される。

何らかの方法によって「ケアされている」という体験をすることなしに、いきなり「ケアする者」となりうるとするのは、親の愛情は自然発生的に生じるとする神話にしがみつこう考え方である。弱い者に対して援助してあげたいという共感的反応が生起するという自然主義を否定するわけではないが、それをあまりに自明視していたことが、問題を隠蔽することとなった。

「妊娠・出産」することによってケアされるどころか、そのことで社会的非難や自己嫌悪を引き起こす場合も少なくない。性暴力を受けて妊娠してしまう場合や、婚姻外で妊娠し、それを認知されない場合など、最もケアが必要な状況なのに、彼女

たちはケアからほど遠いところにおかれるのである。そうした状況は、子どもとの関係に暗い影を投げかけやすい。

「ケアされている」という状況と無縁なままに、「ケア」をしなければならぬ事態は、どのようなケアをもたらすのであろうか。自分が今「ケアする」行為が「ケアされている」子どもにとつて、果たしてケアといえるものとなっているのかどうかは確信できないのは辛い事態である。子どもは言語を習得するまで、「泣く」と「身体をバタバタすること」でしか反応を示さないからである。そのことは「ケアする者」を非常な不安と試行錯誤に追い込んでいく。

社会学者春日キスヨは、育児不安と疲労について四点をあげている¹⁴⁾。

① 労働と休息の区別が明確でない二四時間の継続する労働であること。

② 機械化がまったく不可能で、たえず生理的欲求や心理的反応をキャッチし続けるため、神経の休まる暇がないこと。

③ 新しいコミュニケーションの開発に苦勞しなければならぬこと。

④ 行動を予測しにくいいため、気を休める暇がないこと。

「ケアする者」のケアが起こす問題は、暴力や虐待だけではない。「ケア」の過剰化によって、子どもを依存状態のままにおき、自立に向けての発達を疎外している場合もある。そこでは「ケア」とは一方的なものではなく、相互的なものであると

いう認識が不在なのである。

そうしたケアする者の不安定な状態に対してこそ、社会的ケアが必要である。実際、「ケアされている」という体験を通して、「ケアすること」の意味が体得されるからである。つまりそれが相互的なものであること、そこに自然的感情だけでなく、他者を通して自己を見つめ直す倫理的側面があるということだ。

一九八九年に国連総会で採択された「子どもの権利」条約において、子どもは不適切な関与、つまり虐待や搾取から保護されねばならないことは明記されている。だが他方適切なケアとは何かに関しては、触れられることはない。それは、様々な地域の特異性や文化的・宗教的環境の差異などを重んじるからである。そうした条約に抜けているからといって、子どもと「ケア」、あるいは「ケアする者」の二次的ケアなどの問題が軽視されていいわけではない。もしそうならば、「子どもの権利」条約もまた、子どもに無関心な大人の自己満足にとどまってしまうだろう。ケアの循環性を踏まえた、公的なケアの内実が議論されねばならない。

（五）課題は続く

妊娠・出産する者が十分な社会的ケアを受け、喜びとエネルギーに満ちた心身状態で子どものケアに関わっていく社会をめざす地域は、地球上に存在するに違いない。しかしそれが現在

の日本ではないことは確かである。

未だ模索中のまま書かれているこのノートのために書き記しておきたいのは、私も関わった一九八〇年代第二期フェミニズム運動の初期の頃に、同じような思いを持った者が集まって、共同保育の試みがなされていたことである。子どもに対するケアのあり方に不安をもった親たちが集まり、子どもを遊ばせながら、語り合う場と時間を作り出した。いわゆるコンシヤスネス・レイジング（意識覚醒）運動の一環として、閉塞的な親子関係からくる悩みを率直に語り合い、問題を共有する試みだった。

今から思えば、それは「ケアする者」の相互ケアのネットワークキングだったと思う。公的なケアなど全く望めない時期だったから、自分たちで何かをしなければという思いだけで実現したのだ。相互に「ケアしあう」ことの喜びがそこにあった。そこで「子育ては自分育て」という言葉が生み出され、人間育成を学ぶ場を、自分たちで作ろうと動き出した。

そうした集まりにおいて、家庭でなされている家事・育児などの無償労働が社会的に低く評価されているのはおかしいなどの問題意識が生まれてきた。生産労働は認めても、ケア労働に価値を認めない社会のあり方を問い直す根本的疑問も語られていた。その中からケアに関して本格的に学び直し、専門家の道を歩んだ人もいる

今から三〇年前であるが、問題は今も変わっていないようである。それどころか、地域によってはこうした相互ケアの自発

的集まりすら持つことは困難で、ケアする者の孤立状態は強まっているように思える。ケア・ワークの専門領域化は望ましいが、それを実際生活の中にどのように浸透させるかが不明なままに、場当たりの政策が提示される現状は、問題解決を先送りするだけではないだろうか¹⁵⁾。

共同体の解体とともに個人主義が前面に出ているが、それとともに相互ケア力が劣化しているように思える。そうした状況は弱い立場にある者、特に子どもに大きな影響を与える。子どもの貧困が近年指摘されているが、それは経済的問題にとどまらず、ケアの欠落状況をも示唆している。だが、もはやそれを個々の女性の責任に帰す時代ではない。社会がいかにして相互ケアを可能にする下支えを行うか。それが問われているのである。耳を傾けるべき提言も少なくない¹⁶⁾。今後も、「ケア」の社会倫理を追究し続ける必要性を痛感している。

註

1. S. ドウ・ボーヴォワール『第二の性』Ⅱ、中嶋公子監訳、新潮社、一九九七年、三二一頁
2. 「子ども論ノート・・・愛育・疎外そして権利」、近畿大学大学院文芸学研究所『渾沌』第六号、二〇〇九年
3. リプロダクティヴ法と政策センター「リプロダクティヴ・ライツ」房野桂訳、明石書店、二〇〇一年、三七頁
4. 同上、三九頁
5. 上野千鶴子『おひとりさまの老後』、法研、二〇〇九年参照、性差ミニマリストの唯物論的な少子化・高齢化社会分析である。
6. MAファインマン『ケアの絆』速水葉子他訳、岩波書店、二〇〇九年、一八七頁 (MA Fineman, *The Autonomy Myth*, The New York Press, 2004)
7. N. ノディングス『ケアリング』立山善泰他訳、晃洋書房、一九九七年、一三頁 (Nel Noddings, *Caring, A feminine Approach to Ethics*, The Regents of the University of California, 1984)
8. エレヴィナス『実存から実存者へ』、西谷修訳、講談社、一九九六年、一八五頁、翻訳語が現在の問題ある場合は訳語を変更した。
9. 横田増生『フランスの子育てが日本よりも10倍楽な理由』洋泉社、二〇〇九年、一二二頁
10. ノディングス、七六頁
11. 同上、七八頁
12. ファインマン、二九頁
13. 同上、三一頁
14. 春日キスヨ『介護問題の社会学』岩波書店、二〇〇一年、四一頁
15. 「子ども手当」は、ドイツの現物給付方式を参考になっているが、これは性別役割分業の温存を前提としている。むしろ

「ケアする者」の社会的ケアを重視するスウェーデンの就労・子育て支援両立型やフランスで見られる子育て支援充実型などの方式を取り入れる議論が必要であろう。

16. 島崎謙治が、子育て支援を国や地方自治体の施策だけにとどめるのではなく、企業や地域を含めた社会全体の「子育て力」の回復を提言しているのが注目される。国立社会保障・人口問題研究所編『子育て世帯の社会保障』東京大学出版会、二〇〇五年参照

参考文献

浅野素女『フランス家族事情』岩波書店、一九九五年

江原由美子他編、『日本のフェミニズム』5、岩波書店、

二〇〇九年

小谷敏編『子ども論を読む』、世界思想社、二〇〇三年

関西倫理学会『倫理学研究』第二八号、見洋書房、二〇〇八年

杉浦浩美『働く女性とマタニティ・ハラスメント』大月書店、二〇〇九年

前田正子『子育ては、いま』岩波書店、二〇〇三年

森田ゆり『子どもへの性的虐待』。岩波書店、二〇〇八年

山根純佳『なぜ女性はケア労働をするのか』勁草書房、二〇一〇年

山野良一『子どもの最貧国・日本』光文社、二〇〇八年

Buber, M. *I and Thou*, trans. by W. Kaufmann, Charles Scribner, s Sons, 1970

Butler, J. *Gender Trouble*, Routledge, 1990

Chodorow, N. *The Reproduction of Mothering*, University of California, 1978

Gilligan, C. *Woman, s Place in Man, s Life Cycle*, Harvard Educational Review, 49, 1979

Noddings, N. *Happiness and Education*, Cambridge university Press, 2003